チャンスは一度だけ

三滝　まどか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チャンスは一度だけ

【Ｎコード】
Ｎ９６７２Ｏ

【作者名】
三滝　まどか

【あらすじ】
男に裏切られ、一人寂しく三十路を迎えた美冬。
自殺を考える美冬のもとに、怪しいダイレクトメールが送られてくる。
「あなたの人生が変わります」というありきたりなタイトルの下には、到底信じられない説明と、ある条件が書いてあった。
どん底の三十路女は、人生を変えることができるのか。

【どん底より】どうにでもなれと

美冬は今日、三十路になった。
「あけましておめでとう」と幸福顔で人々が行きかうショッピングモールで、一人寂しく座っている。
家族の笑い声、いちゃつくカップル、幸せそうなムードすべてが癇に障る。
世の中は喜びで包まれているのに、私だけはそうじゃない。
私は今、不幸のどん底にいる。
正月という行事が、美冬は嫌いだった。
子供の頃から誕生日なのにケーキが出ることはなく、おせち料理が定番でお年玉がプレゼントだったからだ。
「お正月なんて大っ嫌い」
恨めしそうに、美冬が呟く。
三十路女が相手となれば、あえて家族も友人も私の誕生日を祝う事はしない。
また、当の自分自身もこの歳を祝う気分になれない。
しかし、誰にも祝ってもらえない事がこんなに寂しいとは、美冬は今まで知らなかった。

去年のクリスマス、7年間付き合ってきた同い年の男と別れた。
7年も付き合い、周囲からは結婚してもおかしくないと言われて、美冬もそろそろ結婚したいと焦り始めた頃である。
クリスマスの夜、レストランで突然別れを切り出された。
いきなりのことで動揺してしまった美冬は、眼前が真っ白になった。
徐々に現実が戻ってきて、とめどなく涙が溢れだす。
理由は「結婚しても今まで通りだろうという気がして、魅力が感じられない」ということだった。
「それじゃ」とにこやかに席を立った男は、ドアボーイが開いて待

つレストランの扉から出て行った。
しばらく経ち、何とか涙がおさまった美冬がレストランを出ようとすると、呼び止められた。
「お客様、お会計がまだでございます」
唖然とした美冬だったが、とりあえずその場の会計を済ませる。
笑顔が爽やかなドアボーイの腹を力いっぱい殴ってやりたい衝動に駆られたが、なんとか抑えて帰路に就いた。
吹き付ける１２月の風が、体を凍らせようとしている。
いっそ、感情も凍らせてくれたらいいのに。
美冬の住むマンションに着き、ポストを確認する。
７年も付き合っていたというのに、二人は同棲していなかった。
男の「結婚するまでは一緒に住みたくない」という意見を尊重したからである。
その結婚を、最初から望んでいなかったようだが。
ポストには、１通の白い封筒が入っていた。
「重要なお知らせ？」
保険の更新か何かだろうとその場で開けてみた。
白い厚紙につらつらと目を疑う内容が書かれており、美冬はその場で凍りついた。
「……私があいつの、連帯保証人？」
１千万円を来年１月末日までに返済しろという、催告書であった。

１週間前の悪夢のクリスマスから、美冬は満足に眠れていない。
目を瞑れば、あの男の最後の笑みが浮かんでくる。
あれは、私のこれからの不幸を思って笑ったのだ。
殺してやろうかとも考えたが、携帯電話も自宅の電話も通じない。
相手のマンションにも行ってみたが、引き払われていた。
職場にも尋ねてみたが、１１月いっぱいで退職していたらしい。
いつから騙されていたのかと思うと、悔しさと情けなさで涙が出てきそうになる。

何もかもがどうでもよくなり、絶望しか見えなくなった。
そして、三十路を迎えた今日。
誰にも祝ってもらえず、それどころか身に覚えのない借金まで背負わされている。
美冬は死ぬことばかり考えていた。
自殺相談の電話も掛けてみたが、話は聞いてくれるものの解決策が見つかるわけでもない。
楽な自殺の方法などあるはずもなく、とりあえず考え直してみます、と言って電話を切った。
いざ死にたいと思っても、死ぬ勇気がない。
その事実が、また自分の心を苦しめる。
少しでも人の多い場所に行けば気分も晴れるかと、このショッピングモールに来てみたが逆効果だった。
余計に自分が惨めに感じるだけで、自分だけが不幸であると錯覚を起こしそうになる。
「もう帰ろう……」
美冬はゆっくりと立ちあがり、賑やかなショッピングモールを後にした。

【どん底より】招待

自宅近くの商店街を通ると、どの店もシャッターが閉まっており、そこには謹賀新年の張り紙があった。
こんな日に営業をしているのはコンビニだけで、レジに立っている店員はやる気のなさそうな顔をしている。
「誰だってこんな日に仕事なんてしたくないし、まして嫌な気分なんて味わいたくないわ」
美冬は大きなため息をつき、とぼとぼと自宅を目指した。
丁度マンションの入り口が見えてきた時、黒いスーツの男が出てきて、黒い車で走り去って行った。
――こんな日に黒ずくめなんて、なんか嫌な感じ。
美冬は陰鬱な気分でマンションに入り、ポストの中を確認した。
取り出した郵便物を、その場で一つ一つ目を通していく。
「年賀はがきと、どこかの店のチラシと……」
郵便物の中に、はがきサイズの黒い封筒が紛れている。
「何これ？」
とりあえず美冬は自宅に戻り、居間でしげしげと黒い封筒を見た。
その封筒には、「柏木美冬様」と宛名だけが書かれている。
差出人の名前はなく、切手すら貼られていない。
直に届けられたというのが余計に薄気味悪い。
「まさか、取り立て屋の嫌がらせかしら」
そうだとしたら、どのような恐ろしい文句が書いてあるのだろう。
想像しただけで封筒を持つ手が震えてきた。
「……でも、見た方がいいわよね。見なかったことで何かあると怖いし」
恐る恐る、隙間から指を差し入れて封を開けてみる。
心臓の鼓動がどんどん速くなる。
きっと人が傍にいれば聞こえるほどに、美冬の心臓はドクドクと大

きな音を立てていた。
中から一枚の紙が出てきた。
そこには、封筒の禍々しい外見には似つかわしくないカラフルな文字が印刷されており、「あなたの人生、変わります！」というタイトルが目を引いた。
「新手の詐欺？こんな時に……。軽々しく人の人生が変わるなんて、ろくなもんじゃないわ」
そう言いつつも、一体どんなことが書いてあるのだろうかと少し興味が湧いた。
写真も、イラストもない。ただ文章が書いてあるだけ。
しかし、その内容を読めば写真もイラストも載せようのないことだと分かった。

『あなたの人生、変わります！
人生良いことが無かった、借金地獄だ、明日生きる希望もない――等々。
今まさに人生の苦境に耐えているあなた。「生きていても死んでも同じだ」
そう思っていませんか？その命、無駄にするのはもったいない。
死ぬ気になれば何でもできる！
騙されたと思って、ぜひ当セミナーを受講してみてください。
受講料は無料です！受講後に何かを購入して頂くといったこともございません。
あなたの人生、変えてみたいと思いませんか？
ご予約はこちらから↓ＴＥＬ：〇〇-〇〇〇-〇〇〇〇』

自分の事を言われているようでドキッとした。
まるで、私の事を知っているみたい。
これは偶然の一致かしら。神の啓示というもの？
電話をしてみようか……いや、これは詐欺の常套手段じゃないかし

ら。
美冬の心はぐるぐると動いた。
コードレスの電話を持ったり、置いたり。
何度かそれを繰り返した後、話を聞くだけならと決心して書いてある電話番号にかけてみた。

トゥルルルル……トゥルルルル……

もう１０回はコール音が鳴ったが、相手は出ない。
「やっぱり嫌がらせか。たちが悪い」
そう言って切ろうとした瞬間、受話器から相手の声がした。
「……研究所でございます」
若い女性の声だった。
研究所？よく聞き取れなかったが化粧品の研究所だろうか。
「今日届いていた郵便を見て電話をしたのですが……」
「柏木美冬様、でございますね」
美冬は心底驚いた。
面識もないのに、なぜ私の名前を知っているのだろう。
「え…ええ、そうです」
「お電話ありがとうございます。当研究所のセミナーのご予約でよろしいですか？」
「あの、本当に受講料は無料なんですか？」
「はい、当研究所では費用は一切頂いておりません」
「そうですか。じゃあ、予約したいと思います」
「かしこまりました。当セミナーはお客様のご都合に合わせて開催しております。
柏木様のご都合のよいお日にちを教えて頂けますか？」
こちらの都合に合わせるということは、参加者が余程少ないか、このセミナーはマンツーマンという事になる。
単なるセミナーだから、面倒になれば聞き流せばいいかと思ってい

た美冬は少し気が動転した。
「私の都合でしたら、明日のお昼が一番良いのですが」
いきなりともなれば、相手方も都合が悪いはず。
面倒事はこれ以上増やしたくないし、セミナーの参加は見送ろう。
そう考えた美冬だったが……
「かしこまりました。それでしたら、明日午後1時でもよろしいでしょうか？」
相手は非常に柔軟に対応してきた。
――ここまできて「やっぱり行きません」なんて言いにくいし、無料なのだから断る理由もないか。
そう思い、美冬はそれでいいと答えた。
「かしこまりました。それでは明日の午後1時にお待ちしております。
12時半頃に、当研究所の送迎車が柏木様のご自宅までお伺いいたします。
最後に何かご質問はございますか？」
自宅に送迎車が来るなど、普通の事ではない。
何か犯罪に巻き込まれているのではないかと心配になってきた。
「あの、セミナーって何時間あるんですか？」
「セミナー自体は1時間程度の予定でございます」
「わざわざこちらまで送迎して頂かなくても、場所を教えて頂けたら私から伺います」
「いえ、柏木様に費用のご負担をさせる事はできません。
当研究所ではそれが規則となっております。
また、柏木様がセミナーを途中辞退されたいと思われたら、それも構いません。
その場合でも、当方がお送りする事になりますが……よろしいでしょうか」
途中で帰ってもいいのなら、と美冬は承諾した。
電話を切った後で、結局自分が知っている事はほとんどないことに

気付いた。
もう一度、あの紙を見る。
――死ぬ気になれば、何でもできる！
もしこれが悪徳商法だったとしても、私には払えるものはない。
もしこれが何かの犯罪グループだったとしても、どうせ死ぬ気なんだから殺されても構わない。
今さら迷う必要なんてない。
美冬は腹を括った。
そして、手に持っているあの紙と封筒を細かく破いて棄てた。
手がかじかんで、思うように動かない。
そういえば、帰ってきてからまだ暖房を入れていない。
窓の外を見ると、陽が沈もうとしていた。
赤く輝く太陽が、一度眩しく輝いて山の向こうへ隠れていった。
そのあとの、ピンクとも紫ともいえない残光が辺りを照らして、ビルや車の影を消す。
沈んだ太陽のあとを見つめる美冬の影も、消えていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9672o/

チャンスは一度だけ

2010年12月8日17時12分発行